

私の夏の思い出 ～佐倉里帰りの記憶～

159 八千代松陰高等学校 鉄道模型部

「ゴォーオー」

モーターが軋むように唸り、電車は緑の海を切り裂き、駆け抜ける。その轟音に引き戻されるように、私は目を覚ました。窓の外には、果てしなく続く田畑が夏風に揺れ、その向こうに見慣れた里山の稜線が淡く霞んでいた。懐かしい風景に、胸の奥が静かに満たされていく。大学4年の夏、私は東京から佐倉へ向かった。「近いうちに帰る」と言いながら、3年が過ぎていた。

「家族は元気になっているだろうか？」そんなことを考えた、その瞬間だった。不意に窓の景色が闇に閉ざされる。上京したあの日の車窓で抱いた不安が、ふと胸をよぎる。だが、あの時のような心細さはなかった。この闇を抜けた先に、私の帰る場所がある。やがて眩い光が車内へ差し込み、胸のつかえは、光にほどけるように消えていった。そして、光の先にはあの頃と変わらない故郷があった。